古□書□

監杉弓剣續集讃

右のへ矢

陵

[illegible]年夏五月

へ5
1884

松かさ風　上

古かしらん　下

特
へ 5
1884

当せいふう

ねことゝか

上　下

安永八年己亥

歳旦

平井

安永八年己亥

歳旦

李井

古家やかゝる如
松ヶ建些ころ

龍澤文庫

さいたん

としとし門出の程〳〵のむかし哉　點水

けさとを初穂拾ふ命かな　存義

喰積や柑子橘庭さかり　樓川

元日やあそふ多ゐ出の松こゝろつくし　雜口

かいしぬと餅のうりからえぬ老か哉　蘂只

玄小寒く杖見て玄んかゝり哉　田女

人日

あらあらと明けて七種七日かな　存義

姫枝小踊如きかれ廿歳かな　李井

春の部

粥杖に小京おらしや女牛まて　樸川

梅か香の戸ふところてや懐手　黙水

垣結ひしおしろ芽かし春の色　田女

菫葉よあまし折りする蕨かな　存義

接木の梅咲にけり白中　、

墨ぬけの夜子あけしろ梅の花　雛口

若菜摘む袖重ね手似れの畑かな　葵足

哥仙

梅か香や思ひもかけぬ谷の底　葵足

鶯にあちもれしハ毛てき天気　雪井

ら

ちり塚の心竜を日にさらしわらはせ　、

垣ひ崩ての錢のゑの標　葵

梅松のかたふき寂し十三秋　、

冬凪に棲き舟の香に合　李

風呂敷て追ちらし赤蜻蛉　、

公儀衆比の側に無事に居ん　葵

ほそりし日影辞に君の胡　、

切溜桐の桂うら仙　李

為に知らぬ妻の帯に抱かれて　、

大工左官も憲の世間　葵

月くしと言ふこほれ香汁の溜　、

八代をうたし利根の夕月　李

稲妻におどしいこるゝのさめかな　、
踊子の居て秋を感ずる　蕪
むら雨かゝりし跡の古跡　、
そり口飛る畔の青芝　李
種物を敷俵の上に帰り鴉　、
わらふたる草履馬を繋ねる　存義

智識る佛ばかりの戻りけり　、
夏山陰の木ゝ湯に香爽　李
色紙に小さき蝶の生れけり　、
かゝしくしと矢代振るゝ　存
お髪の下なるを見つと撫上る　、
子持ちに分れは氣もかくされ　李

小田原の紋ふとく傾鰡　、
馬で重くば実語次曰　葵
さらしくと身ハ出てわき一呼吸　、
あらう蝶ひし五こと桃灯　李
う
川ましおもと背きう商売紫の座　葵
下々の将兵本ふ呼之川郷　李

拝殿の円ば吹ぬく山あらし　、
茶々二百々鏡の毛色く　葵
あんまりとをの心ざし初志めり　、
菓子喜美々女厨も　李
柳志斐

うくひすそ
若やちらくと下りさかの上　李井

眠哉

旧五尺の老木なりけり梅の花　李井

闇に枝突く身の暁哉　雛口

ある人の山荘にて春のはしめと
始るにまかりしに庭に年
經ぬる松栢の操先よりきち
定ひ佛のみならすの翠深く
こそ市中とはさまかえりて
いはこ出しも絶へ文雅の
道しけめはこころもなさに
けふや

八才の誹諧子のこ拾ひ集まハ厄
また餅喰茶飲うち笑けて
吟ぜし句を書ふしくしと

おゐハまとし

山
松か鳩の
飯や春の夜

李井

表六句

青柳や夕部の風の吹あまり　李井

餘寒ハ寒ふと猿も去川　菜足

七年かゝる世に松のしける工夫度　丶

月の出めぐる乗揃へし　李

蟷螂の花ハ上りけり簑子様　、

秋の末の二ころまゝ汐　芸

冬の部

千紙や雀も啼も萩の露　黙水

うらかれの渋茶志ハし升筏　樓川

大名と揃遣ひけりきゝ佛　李井

陰雪や岸にハ舟も野の路　芸足

帰鳥

声ゝ往ハ波の尾をひく夕千鳥　雑口

寒さゝしに酒に吸物　李朱

下略

戌
歳暮

鉄の針ふれなくて年ハ越ぬ　葵足

去年からの娵ハ同年と二ツ越し　雛口

多くなおしやう逢しやいとし一夜　田女

いとしの松や此燈志何にて暮のうち　存義

年内立春

蕗のうゑきて年を
洗ひ習への野梅ふ
眠をさまし行くさ

たるみつく新年や年のうち　黙水

近よるき小春へ逢人嬉しひ　棲川

ざく枝の比

かろくと岸にうつ音のゑしかな

赤子舟

守歳

海老の尾の尖りしと

怖しと嫗きりみより

手斗

銀白の深行き

菜濯か作く

風月に

談合をしや

忙しの絶え

赤子舟

君こそまたや鶉の声のまねし
はけるさへ春の旦をやさ
しらもおもハ新よかの鶉の
まねひよ翫くハまね鶉ほし
はつる俳諧にまなしの風流ハ
鑑こしら鏡のさまこの
おかしきを

皆うえ〻り世の日程よ腹筋
よらしぬしなと李井ごゝろ
其ハ好まして序

安永九年庚子春

歳旦

差ノ月に作めさは絶とも
記くのこゝろを語に
忘れぬしに年をはきまここ
額の銘をかくまて

乗馬の二さぬるゝ
おもふや松かさり

李井

さいたん

元日立春

初日影さすや鶴のかしらまで　黙水

橋の名を結ひとめてや屠蘇の春　存義

梅か咲し葛飾の
稚ひおさて

我庵の中川まで向や若菜の道　楼川

訪へ人来るかゝらぬ衣を春のさま　雑口

何の式かの式をたつ者の春　蓼足

人日

春をしることよ七種おはしまする　楼川

七種の中に亀と書てありしかは　李井

春興

手をぬらすこともゆかし垣の梅　雛口

野の梅れ咲時分ふみを咲ちらり　葵足

鶯のみそろりと明る障子張　黙水

二日見ぬ間にまさりぬる柳哉　存義

哥仙

萬歳や松もさそふ基臺訓　李井

砥磨矢をきせてかゝる弓破　存義

舟立て蚊燻も霧と翻風す　丶

志らうめと銘ろ月の行かな　李

人も来ぬ隣の藪に野の声　丶

秋をとらへて角力の節　存
天目の色よう付るふ燗さまし　、
切燵もとも据ふなりけり　李
髪掃て拵ヨれハ涼しい風出る　、
三國かゝりの人ハ折をせめ　存
洗濯の褌かける掉の先　李
底をとぶる石臺の去　存
持病よりむかふ夕暮ほしけり　李
素人相撲の腰しやくと　存
色紙にみえぬまかりし川の舟　、
大きうもちくほゝ泉のあたりハ　李
御影供ふ姑かるぞ恵ハ指合　、

羽織の上に襷ハ掛てねる　孝

ナ
湿気ほしの噂ありしてハ噂（なし）　悠水

日傘二月でもあハぬ公算用　李

うよ＜＼と這ふ子赤子も世実（出実）　葵足

裏ハ細の着の襟をつけ　竊口

虫の音もちぢに乃とはかりに神無月　李

何に不かくをと知らて家気　葵

おのふるすさきをてらくの割れへし　竊

悲しやらなく＼ハ桜さうち　李

長閑さに宮地く＼のさかるなり　葵

あふ傍て光る夕気　竊

身まてハ乞るかと袖状乞ふぬる　〻

一升さゝに新茶まいりあけ　芙

木綿二十きこへハ駿河之府帰て　李

折からの馬の泉わたし咲く　雛

法ゑんとおゆるうちのあわされハ　芙

木ならし双紙をとり出し見る　李

蝋燭しふ灯のをものうきそふ　雛

いはゝときこゆ又桜ふハる　芙

名裏

梅か香か咲おろしけり銅盥　李丼

菊またまえる升様の深　雛口

お嘆くしと悪きれ猫をいくさいて　丶

いつくしくも声唄人十二之　李

ひざうくと身の秋をうつ瀧の音　〃

小舟着とこそ秋の名合　許

捨谷にみをしらぬ寺の司石　〃

烏帽子の乞食の腮をなでる　李

羽をふ公廣銭の風ふくと白幣　〃

萩はすゝき京の路に路をうり　李

何咲ハぬ婦りして出る記念　許

愛さはらしらぬ奈良の玉味噌　李

椎の葉れ日のめさえに飯を合　〃

半が銭をうる庵の紫檀　許

香盆の匂ひの男の叱らるゝ　李

雛を買ふに初月の紙 紙
伏見の鋼もむかしのまた 李
砂ぼこりくと畑の防風 紙
ナ
弟子の聊をむかふへ投出して 李
やかましあらしとて貰ひ 東武 、
四五日ふみや拝詣も忘れしの花 紙

名田辞に眠る野 、
里人の嫁を見むと添り行 李
池塘に北くく嶋く鶴あり 、
春光の業をも参の一むかし 紙
清くなりみだそる山の頂き 、
家に拝ふ事あからさまてかへる 李

江湖の傍のむらむらと雲　李
怒鷺の鷸をおとこの月の暈　鄰
砧の二つきにさかりくも鳴　李
行蹈にまろ実れぬの常草　鄰
酒一盃に老ぬつもり　、
手紙とハ古ひ訓深と人を呼　李

吹浦ぬけて夕汐の舟　、
林床より走んくの行つむ雲の　樓川
見えりの辺れ眺を持ちら　、

眺月

浮ちまえしハきの露おほふ身　芙足

冬の空ころに拾ふ去の杦　李井
こゝろ志はし燧を家て水を湯のありて　〃
小雨小精のぬれありくこと　蕉
篠舟の綱なひきてハ乱上り　〃
垣根〳〵小蛤し豆のむし　李
芋嶋の汗婦さゝうつれて　〃
文台ハ惜し小谷の大寄　蕉
ふ渋く〳〵いとし〳〵まる記こゝ嘘の年　〃
稍きちらう出陣の枯芒　李
むら〳〵と日え凍の白ふ雪雲　〃
掃ころ掛ふ哉てる紛去　蕉
めけるハの年大ゆりても利根あり　〃

夏小袖きる身の黄昏　季

思寄ハ雪隠中てそ君にしる　、

草一つ〆しのりふの敵立　葵

名物の菜又をもと携まいし　、

二人ならし鎌倉ても忘れ　季

臣達をなくし二見の浦の螺屑に　悠

風ふかくして晩年ありけれ　、

皆しるや君が卯ぞくゑハ小口利く　季

ちゝ何とのてまふ袴ハ着ろ之　、

大黒の笑顔ふ悦顔てふ任せて　悠

枕屋より出るお方御湖の縁　、

未明ていふきもの姉妹ヶ物おもひ　季

饂飩をしむる近在のつれゐや　ゝ

戸障子も生て本書語のさしついて　懸

揉宕日風子なよあ晴さり（長而）　ゝ

莉妙の扉にかけさまて奇の母　ゝ

かまとさりの子の餞にもらて　李

（ら）無奈を振ふて最れし菜も途まで　ゝ

長き治事を妖ぞ之り　懸

今文の今との泥こし翌篭録　ゝ

咲てハ宗ろ古御所のむ　李

破ふて身こ甚ひ惜しめあやちとの　ゝ

雛の姿をゆめて菓子の皿　懸

ノ

鶯むめ柳

鶯や扇面かしく藪はつらん　李井

うくひすや春の空をさし　羽音 、

鶯の音するをきゝめつ小枝のさき 、

冬の梅のさし小志をきゝし柳引 、

冬混雑

ふくさを人をさしう
こゝされは書は嫡孫よ
けふを書てけふはさ

うつし山ゝし大名気に冬の公卿 、

ばかなる鼠のおりかや
しらは

かはきりゑちて
くさししかくつよし　是代公の涯 、

残菊

残菊に淋しく菊は黄菊かな　愚水

残菊や去しめ四民結ぶ金かな　李井

香の間に末ハしぼる火桶哉　雛口

接判の小鉢根に山茶花　李井

水鳥

水鳥や島よあさる田の中　楼川

おし鳥の一かたまりや岩かげ　雛口

水鳥の出様よけや波の手加減　愚水

水鳥飛うくしらなる夜かな　李井

一 歳暮

折をしやまつの様の駆まはる　葵足

華とりに梅もこまめも聖のわれ　李義

おくろくくうきし

河毛の伝の單　雛白

年忘御遊さぬ聖しの関取い　樗川

旅猫居をかとうつて 老のを
一年中の沖に大歳に 穀
たぬしの公民をつゐてまん
ほ仏と居をむらふるのはり
おもと志あふをとり

切結くちまして年やこし せろし　照手

歳晩偶興

李井

惜しきし行の
枯葉れはも散庭

太平記の二冊ハさる語伝ふ
李井君子の所蔵なりしを浅井氏のもとに借りて
ら求ミ只ハ朔して留ミ只ハ秋分くの頃
蔵書のかいとなみつゝ其夜の燈火に書継たり
燈のもとにてとく筆のすさみしぬ
恥かしながら
是を写しぬ

唐の戸に
其まゝの哢ミつゝかは

安永九庚子中之冬

東濱舎
可樓

安永十七二月ヨリ

師竹菴随筆

東岡舎

句作之善悪

手尓於波尓秘事

句作の善悪の中第一てにはいの概をよく〳〵知て
常〳〵心にかけたとしつる句をとしと心得べし
ハ雲御抄に分をとえしりさく錦ることし道の極
なりきとくハ筝法ハ塩梅能く手にさしと各別
なるし分もよくハよ気をとんと志らぬ人多きゆへ毎
管絃の手にかえるより吝し此他管絃ヲも合時ハ
道に長ぜし人数て曰ハ笛の一息ハ調子て
此琵琶の絃ハかるいかるきと数也とときえ

瀧澤文庫

ふくハ花のつくる実と咲くるやうの事なれ能て
又次の日なしと糸竹知る為ならあるまて管絃ニ
長をん人ハ琴笛のさかの事あかの事いくらの
たのしむにふけるべし しかし管絃の学ん
人も不楽なりといふ事なし道の緒ハいつれの道の
宗とて是をきらしてたるんてあり のちのさかひ者なれ
至る人ハいやしく画し楽なしのあしきを知る世ら人ハ
きこゆ画きよするゆへ管絃の行るも志るさず人ハ
きりとをあしく咲く画かるゝにおいとも又同し道ニ
長ぜん人ミ明らかにえる画し かゝしほても
志るん人とのハ流石によしあしん心にもえらんゆ

画しけやく今のゆきゝ志つさへん人ハ江た
こく画このうも但こ今ハいかれるとのもんこゝ文
為れハ系ころによしるると思ふ事ハありもや
まこめとをれハこう志つさるに同しきをく
もるゝ志らんしあのえしいらちを流くまじし
歌を忠論きる新 ふるまで翁ニよりてさらに
作る画しいえしよあき翁もなくところ翁も沿
うしけ音くうみるさ哥惠ハあるへく ここに
俳諧なは踐ことを本とすべし 俳諧にいく
俗語をすりしてもとゆれのうのあまりなら
るこてるてとふハいかしとくハお月さ海
毎ほくてく薄をとりけ事 又胃饌

いふ句ハ古今あまたあれと アザのキリのとまり
文台にのぼせてよまるゝのふつゝかなる
詞無きさまに俳諧も和歌の一体なれハ道に
まつはしゐる者ハ法をふまへて風雅を
忘の句にかはりて座がゝる法の詞た
ありよき花をとり別して丁寧に法をたゞし
釈子が庵中の懐紙ヲおし てよそにくき
尾花庵千万なる詞ハ志くさく肖る風し
物にさとくハ連歌ハ能俳諧ハ狂言なりとぞ
いふ狂歌なりといふも当世はやる歌舞妓
の座の狂言なりとハ本の座にあるまじきひがシ

よく〳〵筆文あらためて 新要之俳諧を
一句の法ともいふ新要之上の五文字を下へ移し
下の五文字をとてなしいろ〳〵に句を移り
侍りしハおのれのみの句からもよく後悔もある
風をまてたとへハ白山兵衛の助といふ者と
同じくあれ山鳥助蔵と思ひし侍りしハ
無下に初心の侍るへし 又一かいに句作を
尋常にとりまとし なるを侍りしハうつくし
ることへ 俳諧めかしく云ふ

はこ根路へのぼりくだりしハ
山とふ山の上なる山ハ富士の根

○高　余情

道の辺に清水流るゝ柳かげ
しばしとてこそ立とまりつれ　西上人

○涼　余情

めでたき余情を知るべし三十一もじの歌もよく
心をかへていまここましてナ十七字の句
ことばの形を少きハ句ごと諧なく蕉門のおしへに
叶ふとくハ淋しからいへんに淋しと言ひ
つらんハ句作りしの所に有る

古池や蛙飛こむ水の音　芭翁

○閑主人云く

此の余情俳諧のよき人云く刻のよこなるを〔ふ〕を
よく無点なりと

咲中を柳ハおそき手摘かな　碩文

此句ともに先師ハ師の白句の心柳を添て
花をとをしりぞける手摘ニ五文字めづらしき
句をとあらハ句作せしからん跡ニ芭蕉翁の

から崎の松も花より朧にて

ひさし朧にてといふ申しを其角人の好吟なり
おほろ也とあらハ花をいふとも哭也
其残此句の衆評諸集ニおし伝はれとも翁の
謂ふ別意らし　松の花より朧にて〳〵しと
ふるまししとおも

秋もはや人ゞ有ありの花ごゝろ
たるしの井の月ハよし次と　西山人

さぞかしよろしき後成人の師ぶりよし
こゝ師ふ花にて柳ハおそき手摘かの句より
其翁のへまハ句作のんお頭らしけるなるべし

天二小をふるこそ七日八日かな　信徳

此句のこゝろをいふとならハ七日八日か凪と無
にて生の頃旅おもしろく日本橋より富士を右に見て
日々旅行七日八日の頃にも駿河の路を経て
富士を詠になまくしさハ木二にみえてもハ
かう申さりいつく又二月と詠てハ当期勤
都方の人ハ知りても大暑なる風に向て旅ある
なりともあるまし是を以二月とあらしハ
風流のならさるへし　又二字二一の名山にも
句の意味二ノ字叶て面白し

闇の枝ハ松原えうり月枝に　其角

此句の心を等るに月夜にても松原ハ夜おし
能かりけるにとの闇の夜にも松原を
おぬきかハ此ハ闇なりけれともいかるさとふ心之
めるよの五文字へ中の五文字を隨て下の
五文字を離し吟すへし　自然と句意
明らかにして是を俳諧に譜法といふ文字法
といふなりと心得へし

○和泉式部貴船明神へ詣る時

ものおもへハ沢の螢も我身より
あくかれ出る玉かとそ見る

明神の御返し

奥山にたきりて落る滝津瀬の
玉ちるはかり物な思ひそ
おとこの声にて

部か書紀といふ名婦の名をいつくまて
当時の歌合なとふ句作るもの多く見えたり

○いにしへハ盛徳あるものとして大歓の達人なり歓の
志すべきを見る折からに隠れし株の兄落
さるし是等人の実業へとか申よく
世人の知る所へ人も能かれさる
ける人

○寒食

介子推ハ晋ノ文公太子たりし時乱ヲ避て
外ニありし時従ひし臣人也後文公
国ニ帰り位ニ即しの日ニ従ひし臣人ヲ
祢しタルニ子推ヲもらス故子推隠ル

むかし唐土に介子推といふ人あり帝是を
召しけれともあくまで世をいとふるの心ありし山深く
入て隠れけりされハ官人山ニ火をかけて焼く
火に山谷に満て誰ニか行るの地もなかりしと
ふことなし子推これにも挫けずして
終に焼死し故帝是ヲ哀みて毎年
彼の日ハ大内よりそめしめて浦々の民家迄
火ヲ禁じけるとなん清明の節前二日ハ子推
が死をし日なりと云

○除目

司召　正月十一日　八月十一日

除目とは士ヲ撰ぶ義にて官爵ヲ授け給ふ之
春ハ十日年中行事の命であるなどの除目と
いふ是ハ外官ヲもつて任ずることし外官とて
除目の司召とは中ヲあるとハ中じ外の

人ニシ召て位官ニシさ弟らるゝしハかよふく、
其務ニ侍るものや　秋無ニ有る六位以上の
加階ニシたる人無き事ハ蔵人能行ニ撰ミ官
爵ヲぬひけるとハ人ニシ撰ミ出シて官爵ヲ
定るヲかへてといふ也や

二ノ町　禁裏ノ町の名也

めハ源氏ニおもるハ柴桐のきはしたとへハ引おしの
数の其下或ハ仕切の門の数など初手の仕切上の引
おし中のとゝ柴桐の門の引お仕切木の数ニ一二と
いへる事也　此二ノ町を口ヲ定し漢をへらしを

二日八と講の沙汰もありしとそ

此日の其志十五ヶ条ニ百貞ニさる旬行ニ立路子
とて或者流の旬を師らヲ定しけるとて行る
此旬の意ニ寄る不
奥儀抄ニ曰古今ニ二日八とよめるハ何の故にて
日知をる人おしふれ初なると云ふなるへし竊ニ

八声の鳥といふと是鶏の初声也されハ
此鶏の啼とよみて八ツの声ヲ初と讀る也
八ツの声といふ心也
三条大納言の歌に
ささくりし房小名声もしらさに
二口八もとに跡しまされ
此解を口授す

○炭ふく負翁句に
子ハ裸父ハてゝれて早苗船　利牛
信伴のもとも物ヲ裸にて一ツ着さるをすへく
このしろハ夕顔棚のしる涼さ
松ところハてゝら女ハ帯して　西上人
てゝらふさく

○粋の戯

粋ハよく女に恋好なる事のミなと俗説にいひ
侍るなれともさにや色好る人にたとへく
れその道の事にくはしきをもいふへし又
さる事にしれたる人ハ万しる者をさす
前シ方くらへ粋のさる所習

石川丸

風流子（タハレヲ） 又 風流雄
又 狂夫

○鴻臚館

蕃客をもてなす所也東寺なるを云
とみへたり言蕃所ハ此館の所へし

○草石蚕（チヨロギ）

○石決明（アハビ）

○白膠木（ヌルデ）
（勝軍木）

○覇王樹（サボテン）
イロヘロ
サツホウ

○荼蘼（ヤマブキ）

○山中閑寂人跡稀

春羽のふる春あるゝやま花の蒂　冠里公

此句の解ハをましくと問へハ
三躰和歌集に
大(フトリ タクマシキ)　といふ題　正徹和尚

よし野川花の春しりて　なかるめり
かきよの中に流瀬もこゝろふ

又句
ちる花の春をしふよふ太山かな　宗祇法師

俳諧

ちる花の名にきえて
しはし橋のさ　　支考

めでたく連俳と申しながら誹諧の姿に中ゆく
事なる事なのくさ意の道なる許感解
面白きなすゞあらぬや冠里公ハ支考
が鏡の上へなる也し

○富士へ入る日をとる蝉や　　其角

ふの月

是ハ源氏のうつせみといふ巻へし
空蝉ハ源氏十六帖の貞女としてみえたる其の
道ひきくる時関房りぬ事なるを姿ヲ隠しぬと
よみたる空蝉の君もし中をしや妻しく無き
源語ヲ見るへし
されハ此巻の不二へ入る日を空蝉と
せる名月ヲ見えたる君とみて
へかるべなれ
霜子に吟ハ此のふ刀許し誹ミ作力称まて
凡し

空蝉

又セミのぬけがらともいふ常ハせミともいふ
殻のある也セミともいふ殻ハ付ものゆへ
うつせミともいふ常のせミより付蝉とし
詠し　かな葉おもて又にかりて人合すべし
とけ条ロせてし浅くしも至ことも

一　長頭麿ハ貞徳述作俳諧のさし合の事を編
書し題号を御傘と附らるそうなるを
天子の御かさハ誰かつゝことのミ書し故にさ
し書をおかさハ必俳諧し句毎にさし合あるなる
ことかやきゝもしとかや

御傘（ギョサン）ト訓

一　長頭麿ハまたまれし（？）連歌之句をとる
さのまた句をかゝず年ハらうしとて新
かられーーとうや

一　下らぬハ鴨之上らぬハ加賀之下ことより

誹諧とハ云へしとそ

一 毎年正月四日北野松梅院においてハ裏白乃連歌ありて其連歌の懐紙四枚也中古執筆の人誤りて行面を除て出せしより流例となりて行し由并を重又外に紙一枚にて添五枚しまとめて裏白の連歌と云しとそや

一 鉄炮ハ大永六年井上新左衛門と云西國の浪人初て甲州　信虎公へ献しけるとかや

一 四姫の事　春ハ佐保姫　夏ハ遠山姫　秋ハ立田姫　冬ハ山姫

一 無心気傷の歌といふハさのミ気にかゝらせて讀ぬことに心ありておもひ入気あるてよめれハ面白くよむ内に気ハおもむきて　俳諧の句もこれに准ス

一 菓子の物ハ　蓮の実　柑子　橘
餅菓子ハ　まめの葉　ほうれん草　かくなし　さんまんちう　十こか羊羹

一 喪ハ秘穢しくおもふしゆへにかくしく
ころもとさしくしめかなりしにもしゆゑにはくて保養
の國よりさめ物を代ありしてものく
とハ本をしくして是知れらく帰し

一 涅槃經に曰 万物用而人自帰

一 まがる帰しと下 万事に蝉之喪之
まがるハよくまがれるをとくし 蝉も膠細く
まわれらし 康もけし 古物なしも古ツ

すがれるをとしくるあるべし

一 康を代らくハ帰めしの也

一 伍名の物をとハ黒泥としてをまを宗旅けると
人のやされし

一 さの日柏とハ大枋し云ふや此事を風のふ事ハ
雲おもてつくるや此事に慶の柏をふ世にて
有し柏し云

一 五月十二日竹酔日又日帰を植れハよく
栄るとてり 來りて植るに足をく踏でと

はしまりしとかや

一 状元の事 唐の民嬰児の時分に僅に
状元といふ字を紅脂にて書し今日まて
年始に寿餅として寿の字を記る
かくまても状元のしるしにや

一 萬代のはしまりといふハ堆朱茂波の
後ハ末代のハ絶て知人なし

一 鎌倉山をとうたうて昔火の如の時宜ハ
化しに此家ゟ起り火の如き猶も今の
水の流る如く大将家の鎌倉出替して於ハ
民の家居も無事にて水をたへまかここに
崖をとめ家しもや ひらかれしより源氏
源氏のまもりをそへてけり

一 鉄輪ハ人の手の月ありとい七日に奇の月をと
そもなりけり

一 わらへの縫ふ人としつとひ居て 誕を掛て

縫ひしよ給ゑよふ帯むすく続の袴をハ
とよ云の上の句を継て出しける人て
こそ兼けれ し 其一つくより東牛と解
ゆるせり又ゆかぬ別の為ハ心なかハし
同し云の下の句をかしらずれハ此継ハ
聟ひめ名ハまそ存まそしめの継と
同しんる解牛ありんと云ハ
鱼行りく 和らし 句りし

一 葷のことも
はなつきこゝろ臭つくる也よ葷を知らし
いくり
五辛ハ 大ビル 小ビル クレのカモ ニンニク ニラ
朝葱（アサツキ） 韮（ニラ） 蒜（ニンニク）．

一 奉納法楽の事
法楽を会中みく情氏能人を納
さるや奉納ハ㕝納るゝし

一 腹赤贄（はらかのにへ）　元日節会にて魚を筑紫ゟ
奉る　むかしハ鰚と云魚のよし

一 恵具採摘（ゑぐつむ）　万葉　君か為山田の沢にゑく
つむと雪解の水に
もすそぬらしつ

ゑくとハ
世俗しゑくことなりといふとこし
同意く花をりてよさく草の水辺に
いろく哉ハゑくとしハ芹をいふとし云
万葉集し六帖ハにも芹の事を記こ

ゑくとは何事より　後拾遺若菜
を仲実朝臣のもとへ贈るとて
よめる
をとつ川よそにみるらむこゝろにわれさと
摘しゑくのしるしそ人の為を

返し
いさしらすゑくのしるしみ摘まあて
いしこもまりてあふ根芹か
と云　此歌ハゑくをゑくとよめり
ゑし

せ斗よかり見ゆくし同物と称ゆるゝ
又見ゆくと云る雨乃万葉集 廿しよう
されハ見ゆくし若りしとつ物の名を
云ふ

一 春左襌（ザレ）
八雲抄ニ 春されとも見り
春ハ左襌ハとい子歌ニ見ゆ 又同ゟし

一 廿ア角組
萌の作の以ぎ治書之 廿アニ見ゆる萩
葉薄 春廿葉なとし作の以ぎとい子書之

一 菫黒薄（スグロノスヽキ）
春ニ色の薄しハ春の焼地の薄の末
黒きなり 色の字を略しまゝに
とゝるや 袖中抄 或人云 黒さゝハ薄の
古き葉をハ焼てとい子 是古き本の種を
見られハ春になる子 是れ角組之

一 萌 植物としたし 故 嫋なし 非水辺

一 樺櫻（カバ）
春ゝ物の名ニ言はさくらと 叫る是之

和名ハ朱槿（カバ）といふ紅の花なり

一 閑居鳥　呼子鳥　胡鳥

春ハ育子雛子の啼不和を其母来りて

行合と呼子鳥とも

呼子鳥とも　胡鳥とも云也

一 鈴篭指

胡鳥子この子を鈴ヶ鳴れハ雛の知りて

鈴の口ニ桃を出しさまを鈴の子

ともよし

一 蛙（カハツ）

蛙とハ泥より鳴の声ハよまずて　八雲御抄

一 踏（フム）青ヲ

唐ニ上巳の日曲江の辺ニ至り人

あそびし酒のミて草をふミし

遊戯あそびてといふなし

一 花筏

花のちりたる筏なし又花のうきて流るると云

一 櫻人
賤しき木のこりひおとこ花人なとゝ云 雇はるゝ
をとこ又こりひおとこ、櫻の枝手折
取る人のことをさくら人と云

一 青簾
まろやかのまきれなき雅羽翔華の簾とも
四月朔日新しき御簾を御殿にかくる

一 嫩葉（ワりうバ）
麦葉に虫のさしてわくらはなると云

一 楝佩
五月五日俗人取テ楝葉ヲ佩テ之避ク悪鬼ヲ
楝ハ俗にせんだんの木也と云
栴檀（センダン）

一 忘草
萱草 ・北堂ニ栽ル萱（シイ）草ヲ
能忘ル憂ヲ

一 櫻麻
麻の中にさくら色したるをと云

一 令法 ハタツモリ
畑をする緒やつハ助かな

一 擣衣
八月十五夜ゝ初しくつやそおゝ係

一 穴路花園
萩もく池を花や錦秋

一 杜父魚 カジカ
岸ゝまむ魚之大サ鮎のほし 想抄
鉢をみしらく 鰭向し 背中ゝ鳴声
黒にしてとし 少似より 夏秋日本
みゝ鳴 秋

一 鶉衣
うまくかさしき衣かな

一 残暑
秋く鉄路に鳴く一生くとも之

一 萩かま秋
植物ゝ娘也 万の味りする雅之

一 志ゆうき
とえりも気や 時毎に風のそよぎ初し

雷の事を神なりハ雷光と鳴ると云なりきに似
たるものなり雲ハ雷と風と外
雷志ずまるハ時雨し雷と風しづまる也
こぼれハ百雷二色寄ちる事
一 ふぶき　冬風の名也
一 袮来　大月の外ハ皆さしかへしと云
一 秋沙（アキサ）　河に居る鳥也浮寝をよめり

○伊吹山のさしも草と近江の伊吹山に有しを
下野の伊吹山なり袖中抄に後拾遺にのせ
たる實方のかくとだにえやハいぶきの
さしも草といふ歌をひきて此伊吹山
美濃近江の境の山にあらず下野の國の
伊吹山なり能因が坤元儀にさしもと
出ましけり綺語抄に伊吹山ハ下野の
國にありけり此山にさせもといふ所ありしかひ
なりと志るせり六帖に

下野の志め津の原のさしも草
をのか思ひに身をや焼らん
枕草子ニ下野へいきける人に
思ひたにかゝらぬ山のさせも草
たれか伊ふきの里ハつけしそ
古哥をとれハ下野の伊吹山なるとし
あきらけしハ今ハ近江の伊吹山のさせもを
第をちか世人ハおもてさやせ下野にある
山なりしハやまも見えさるも

○帚木におよひをかゝめてと空蝉におよひをかゝ
めて　伊勢におよひの無しとかくとあり
注を見るにおよひハ小指なりといへり
和名抄に指の字を於與比と訓とあり又
季指ハ第五指也和名古於與比とあり
されハおよひハ總して指をいへり違
あやまれり

○此國の女ハ雨ふりて止するときに照法師

ともつかりて晴をいのることに
まる唐國まては帚晴娘といふ明の
劉侗帝城景物畧ニ凡雨久ケレハ以白紙ヲ作ニ
婦人ノ首ヲ剪カニ紅緑紙ヲ衣スルニ之ニ以苕帚苗ヲ
縛ニ小帚ヲ令ム携乃之竿ヲ懸ニ簷際ニ曰帚晴
娘ト云と記せり列朝詩集に獻寧王の
宮詞百首あり其中の詩に君王翌日
宴ニ長春ニ霖雨迷漫寧ㇾ土塵特ニ令満
宮来歇止ニ一時懸挂ス帚晴人となり

○時の鼓うつことは延喜式にみえたり時の貝をも
吹けるにや　ゆききと年の貝つきてあはれ
なれひつしのあゆみちかつきにけりと
赤染衛門集にみえたり

古畫編冊四集

福圖寫藏 二 三四